

第1回・いちほら防災100人会議 会議録概要版

1 日 時 ：平成30年2月3日（土）午後1時00分～午後4時00分
2 会 場 ：市原市役所 第1庁舎（防災庁舎）4階会議室
3 参加者 ：団体選出：46人；無作為抽出：46人 合計92人
4 会議次第 — 開会 — 1) 市長挨拶：小出 譲治 市原市長 2) 内閣府挨拶：内閣府 防災・普及啓発担当 参事官補佐 山口 徳彦 様 3) 会議開催趣旨説明 ・市の現状と取組について 4) アドバイザー基調講演 「地域防災力を高めるために」 跡見学園女子大学 観光コミュニティ学部 教授 鍵屋 一 様 5) ワークショップ形式による話し合い
5 会議経過 [要旨] (1) 市長挨拶 小出市長 <ul style="list-style-type: none">・本市の災害対策の中心拠点となる「防災庁舎」のお披露目の日に「いちほら防災100人会議」が開催でき、また、多くの市民の皆様が参加していただき、防災への関心の高さを認識でき、大変心強く感じています。・市原市が位置する千葉県北西部において、今後30年以内に、マグニチュード7クラスの地震が発生する確率は、70%と予測されています。・近年の気象状況の変化により、全国各地で、想定を超える記録的な集中豪雨が発生するなど、自然災害への十分な備えが急務となっています。・市域が広域である本市では、多様な地域特性にあわせた防災対策が必要となります。・大規模な災害が発生した場合、行政による支援である「公助」が行き届かなくなる可能性が考えられ、災害規模が大きくなるほど、自分の命を自分で守る「自助」の力と、地域の方々の連携による「共助」の力が重要になってきます。・市では現在、本市の防災対策を示す「地域防災計画」について、「自助・共助による防災体制の強化」に重点を置いた、修正作業に取り組んでいるところです。・この「いちほら防災100人会議」は、こうした「自助・共助による防災体制強化」の取り組みのひとつとして、市民の皆様の意見を集約することによって防災対策の実効性を高め、地域防災力の向上を図るとともに、災害に強い地域コミュニティの創生を目指すものであり、6月までに、合計6回の開催を予定しています。・会議でのご意見は、今後、それぞれの地域の実情に即した「地区防災計画」を策定していただくための指針となる、「地区防災計画の手引き」として反映させる予定です。・皆様の思いを地域防災に活かしていくために、この「いちほら防災100人会議」を、実りあるものになりたいと考えており、よろしくようお願い申し上げます。・会議のアドバイザーには、内閣府による「地区防災計画モデル事業」に参加されるなど、「地区防災計画」の研究・実践の第一人者である、跡見学園女子大学の鍵屋教授にお願いしています。



- ・鍵屋教授、大変お忙しいところ、お力添えを賜り、誠にありがとうございます。
- ・さらに、内閣府で「地区防災計画」の策定・推進を担当されている、山口参事官補佐にもおいでいただきました。山口様、お忙しいところありがとうございます。
- ・お二人には、ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。
- ・今後も、万が一の際には、自助、共助、公助により地域と行政が一丸となって災害に立ち向かうことができるよう、安心・安全なまちづくりに、全力で取り組んでまいります。

(2) 内閣府挨拶：内閣府 防災・普及啓発担当 参事官補佐 山口 徳彦 様

- ・内閣府で普及啓発を担当している山口と申します。
- ・この会議に参加されている方で、「地区防災計画制度」を初めて聴いたという方、挙手をお願いします。
- ・はい。だいたい半数の方はご存じの様ですね。
- ・地区防災計画制度は、堅い名前ですけれども、阪神・淡路大震災や東日本大震災で、「共助」により救出されたことが統計上判明しており、これを踏まえて、住民等で計画を作るべきだということで、災害対策基本法の平成 25 年改正で位置づけられ、制度化されたものです。
- ・市町村が策定する「地域防災計画」に、住民等によって自主的に作った防災に関する計画である「地区防災計画」を提案する事ができるという制度です。
- ・内閣府では、平成 26 年度から 3 か年度で 44 地区のモデル地区を設定して「地区防災計画」策定の支援をしてきました。
- ・今日は、「地区防災計画を策定するのか～」と身構えてしまうかもしれませんが、次の 3 つのことを覚えておいて下さい。



1. **楽しく作る**（ひとり 1 アイデアをだすと 100 アイデアとなる）
 2. **歩く**（自宅から避難場所などを歩くことで、新たな気づきがうまれる）
 3. **シンプルに**（簡潔に！あれもこれも詰め込みすぎない）
- ・いろいろ詰め込むと、結局、誰もできない、やりたくなくなる。ということになります。
 - ・基本は 1 つ。「災害時にどこに逃げたら良いのか。」
 - ・家族とどこで待ち合わせて、避難所まで何分かかるのか。
 - ・3 月 24 日に東京で地区防災計画フォーラムを開催し、「地区防災計画」策定への取組事例を紹介する予定です。是非、お足を運んで頂き、ご参考にして頂きたいと思います。
 - ・最後に、この 100 人会議の活動は、必ず災害時に皆様の礎になることを祈念して私の挨拶とさせていただきます。

(3) 会議開催趣旨説明：市原市危機管理課：佐久間課長より

- ・「市原市の現状と取組について」と題し、その内容をプロジェクターに投影して説明。
1. はじめに
- ・市原市は、千葉県のほぼ中央部に位置し、市域は東西 22km、南北 36km、面積は 368.1km と広大な市域を有している。・昭和 38 年に五井、市原、姉崎、市津、三和の 5 町が合併して市原市が誕生し、昭和 42 年に南総町、加茂村が合併して現在の市原市の姿となる。



- ・「阪神・淡路大震災における救助の主体と救助者数」のグラフを用いて説明（写真）。
 - ・阪神・淡路大震災では、家屋の倒壊などによって生き埋めになったり閉じ込められた人のうち、近隣住民等よる救助は、全体の77.1%となっており、「共助」が重要。
 - ・災害による被害を最小限にするためには、公助や「自分の命は自分で守る」という「自助」に加えて「自分たちの地域は自分たちで守る」という「共助」の精神と取組が重要。
2. いちはら防災100人会議について
- ・会議の目的：●自助・共助による防災体制の強化
 - ・会議の目標：●地区防災計画策定の手引きを作成
 - ・市長の挨拶にもあったとおり、近年の気象状況のより極端な集中豪雨の発生など、自然災害への備えが必要となっており、市域が広大な本市では、多様な地域特性にあわせた防災対策を図る必要がある。
 - ・「首都直下地震」が今後30年以内に70%以上の確率で発生することが想定されている。
 - ・このため、現在、修正作業に取り組んでいる地域防災計画では、「自助・共助による防災体制の強化」を計画修正のポイントの1つに掲げ、「共助」の中心的な役割を担う地域コミュニティの住民や事業者の防災活動に関する計画である「地区防災計画」を策定し、地域主体の防災活動を推進して参りたい。
 - ・今回、「自助・共助による防災体制の強化」の取り組みのスタートとして、市民100人による「いはら防災100人会議」を開催し、市原力で防災対策の実効性を高め、地域防災力向上を図るとともに、取り組みを通じて地域コミュニティの創世を目指します。
 - ・この会議では、市民の皆さんが、「地域防災力を高めるために」をメインテーマに、毎回、地域防災や避難生活などの小テーマごとに話し合い、共に防災を「自分ごと」として身近に感じていただき、地区防災計画づくりへつなげることを目的に、平成30年2月から6月までの間に計6回開催します。

3. 市原市の現状

- ・市原市の災害リスク

「地震」：いつ起こるか分からない。

「土砂災害」：土砂災害警戒区域は市内に 302 箇所あり、有秋地区 64 箇所、市津地区 34 箇所、南総地区 126 箇所、加茂地区 47 箇所と土砂災害リスクが高いところがある。

「豪雨・台風」：衛星写真や気象庁の発表する気象情報などから、ある程度予想が付くようになってきた。

臨海部では、コンビナート事故のリスクもある。

4. 市原市の取組

- ・災害対策基本法に基づいた「市原市地域防災計画」を策定し、毎年検討を加え必要があると認めるときは、修正すると定めている。
- ・市では、「一時避難場所」「指定緊急避難場所」「指定避難所」を予め指定している。
- ・市では、計画的な備蓄を進めている。備蓄品は、想定避難者数約 43,000 人の 3 日分の食料や水のほか、避難所運営に必要な消耗品などを、各支所や学校などの備蓄庫に分散備蓄している。
- ・民間事業者との災害協定により、より迅速な調達を行うこととしている。
- ・各種防災訓練（災害対策本部運営、土砂災害、避難所運営など）の実施。
- ・町会との連携による避難所の開設（避難所解錠手段の多様化事業）
- ・地域による避難所開設・運営マニュアルの作成
- ・防災情報は「ちば防災メール（千葉県）」、「市原市情報配信メール」、「エリアメール」・「緊急速報メール」、「防災ラジオ」など、多種多様な情報配信手段でお伝えすることとしている（冗長性・多重化）。

まとめ

- ・自然災害は避けることはできませんが、被害を最小限に食い止めることはできます。
- ・まずは、生きること
- ・そして、地域の方たちと助け合うこと。
それが重要です。
→まずは、できることから防災対策を進めて下さい。

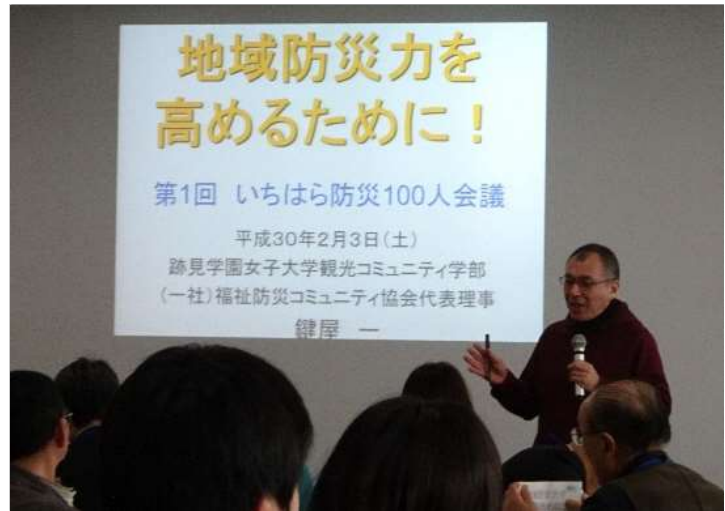
(4) アドバイザー基調講演 跡見学園女子大学 教授 鍵屋 一 様

「地域防災力を高めるために」と題し、その内容をプロジェクターに投影して説明。

- ・参加者は、最初にその場で立って、ジャンケンの「グー」「チョキ」「パー」を両手で行う。右手が左手に勝つように、「グー」「チョキ」「パー」を続けるといった、左右違う動作をする体操を実施した。
→思い通りに動かすことの難しさを参加者に体験してもらった。

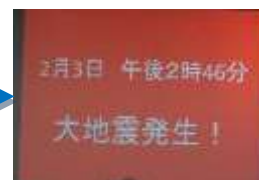


- ・災害対応の現場に行くと、このような状態となっている。
 - ・やったことが無い仕事。やることが沢山ある。
 - ・普段していないことを行うこと。ましてや、急ぐことはうまくいかない。
 - ・災害時は、丁寧に1つずつ行う。命に関わる仕事は特に丁寧にする必要がある。
- ただし、事前に計画を立てて、訓練を行う事によって、ある程度はましになる。
少なくとも命を失うことはなくなる。
- ・私（鍵屋先生）の出身地は、秋田県男鹿市。板橋区役所に入所し、防災課長、福祉部長を経験して、ライフワークとなった。
 - ・秋田県の男鹿市。海の幸が有名。反面、津波といった災いが発生する。1983年日本海中部沖地震で津波災害があった。山沿いの幼稚園の児童が9名亡くなった。
- 日本では、海が無い地域でも、津波の教育が必要。また、山の無い地域でも、火山の教育が必要（数日前、草津白根山の噴火で訓練中の自衛隊員が亡くなった）。
- ・「なまはげ」。「なまけものはいないか？」→地域を津波から守る。（なまはげ防災）
- 「なまはげ」のなり手は、大体若い消防団員。各家をまわり、おとしよりや家族構成などを把握できる。
- 災害時の救助に役立つ。



(5) ワークショップ形式による話し合い

【課題】：ひとり暮らしで、車いすを使って生活しているおとしよりがご近所にいます。おとしよりの命を守り、命をつなぐためには、災害前に何をしたらよいでしょうか。



【ワークショップ】

→各班（全24班）でテーマについて自由に話し合う。

- ・一人ひとりが付箋に感じたこと、気づいたことを自由に記入し模造紙に貼っていく。
- ・貼り付けた付箋の中から、「これが一番良い」というアイデアを各班で1つ選び、A3判用紙に書き写す。
- ・最後に、参加者全員が青丸のシール（いいねシール）を持ち、各班の良いと思ったアイデアにシールを貼っていく。

【ワーキング風景】



問合先：市原市総務部危機管理課

電話：0436-23-9823